

地球の大きさ



金属労協(JCM)事務局長
浅沼弘一

先日、佐原の伊能忠敬記念館を訪ねる機会があった。江戸時代に日本地図を作ったことでその名を知ってはいたが、記念館では、改めてその偉業に触れることができる。佐原の商人であった伊能忠敬は、50歳で家督を長男に譲り、自らは江戸に出て、暦学・天文学を学び始める。以降、日本全土にわたり、都合10回の測量の旅に出かけている。第1回目の蝦夷地への測量旅を皮切りに、その測量範囲も北は蝦夷地から南は屋久島、種子島に至り、五島列島にも足を運んでいる。この間の測量によって得られた記録も膨大で、現地での測量数値から、それに基づいた略図、さらには完成した地図まであわせると、相当な点数になる。その一部は、伊能忠敬記念館に収蔵されており、2010年には「伊能忠敬関係資料(2345点)」として国宝に指定されている。

伊能忠敬を測量に駆り立てた理由の一つは、地球の大きさを知ることである。その方法は単純で、緯度一度分の距離を求め、それを360倍することで地球の大きさ(子午線における円周)を知ることが出来る。ただこれには、測量によって観測点間の正確な距離を測る技術と、天体の観測によって、正確な緯度を測る技術が必要であり、当時としては極めて高いものであった。実際に蝦夷地への測量の結果から得ら

れた経度一度分の距離は28.2里、約111kmとなった。これから求められる地球の円周は、39,900km弱と計算された。1kmの定義が赤道から極までの距離の10000分の1とされた歴史から考えると、ほぼ正確に測定されていることがわかる。

縦に一周すると40,000kmの地球であるが、江戸時代の人々にとっては、考えも及ばない程の距離であったに違いない。当時の一般的な移動方法は徒歩であるが、1時間に移動できる距離は1里、約4kmである。仮に縦に地球を一周すると、直線で移動しても10,000時間、昼夜歩き通しても一年では歩き切れない。当時の人にとって、地球は際限なく大きなものであり、おおかたは未知の世界であったであろう。

さて、今号で報告されているインダストリアル・グローバルユニオンの世界大会は、南米ブラジルのリオデジャネイロで行われた。日本からは地球の全くの反対側。悪い冗談で、待ち合わせまでに時間が無いので、地面を掘り進んでなんとか間に合ったという輩もいたが、まっすぐ地面を掘ると行き当たる場所がだいたいリオデジャネイロである。地表での最短距離は、地球全周の半分であるから約20,000kmの距離となる。この距離をどれだけの時間で移動できるかであるが、参加者それぞれ、欧州経由だったり米国経由だったりしたが、いずれでも所要時間は変わらず乗り継ぎ時間を含めても概ね30時間である。ルートを逆にたどって日本に戻ると地球をまるまる一周したことになり、その所要時間は概ね60時間である。江戸時代の徒歩での一周と比べると、60/10000の時間で済むことになる。別の見方をすれば、伊能忠敬の生きた時代から200年の間

に、地球の実質的な大きさが60/10000と極端に小さくなったということになる。

地球のサイズが小さくなることで、人や物の行き来が容易になり、地球規模での経済や産業の活動が活発になる。いわゆるグローバル化が進む。さらには、物理的な移動を伴わない情報は、世界を一瞬にしてかけめぐら

これほど、距離が近くなり密に接しあうことが可能になった世界であるが、考え方の隔たりはそう簡単には縮まらず、逆に分化する方向へと進んでいるのではないかと危惧される。

中でも日本は特別で、実質的な距離が縮まり、グローバルな活動が進んでいるにもかかわらず、海に周囲を守られているが故に、「海外」に対する「特別な場所」の意識は根強い。特に労働組合にその傾向が強いようにも思う。海外視察が度々報償的な意味あいで運営されてきたということもその原因かもしれない。国境が陸地にある国々の意識と、大きく違うのである。日本における人口の減少が急速に進む一方で、ASEAN諸国を初めとするアジアの国々では、人口が増加し労働環境や生活水準が向上しつつある。アジアの国々の助けをかりずに日本だけで課題を解決することは難しいし、逆にアジアの国々にとっても、日本に期待するところが大きいと感じる。

実質的な距離が十分に小さくなった今、これまでよりももっと外に目を向けて労働組合の活動を行っていかねばならない。JCMとしての取り組み課題であるMNCネットワークもGFAも、まずは考え方を変えないと行き着けないところにある。動きつつある機運を大切にしながら進めて行きたい。